

## 第二章 こじき、王子に出会う

次の日の朝、トムはウェストミンスター宮殿に行き、大きな門の外に立ちました。

そこには背の高い兵士が二人いました。

トムは壮麗な宮殿を眺めましたが、その近くに行くことはできませんでした。

トムが次の日にまた行くと、身分の高い婦人や紳士が宮殿へ行くのが見えましたが、王子を見かけることはありませんでした。

そしてある日トムが再びそこへ行くと、とても立派な服を着た少年が見えました。

「あれは王子のように見えるぞ」とトムはわくわくして思いました。

トムは門へ走って行きました。

「お前はここの中に入ることはできん」と兵士が叫び、トムを殴りました。

王子はこれを見て、好ましく思いませんでした。

「なぜお前はあの貧しい少年を殴ったのだ？」とエドワードは尋ねました。

「門を開き、彼を中へ迎え入れよ」

「しかし、王子さま」と兵士は言いました。

「彼はただの汚い物乞いでありませぬ」

「私の父は豊かな者、そして貧しい者たちの王なのだ」とエドワードは答えました。

兵隊は門を開けて、トムを中へ入れました。

「私と一緒に来るのだ」とエドワードは優しく言いました。

王子はトムを、長い階段や美しい部屋のある大きな宮殿の中へ連れて行きました。

二人が王子の部屋へ着くと、エドワードは召使いを呼びました。

「食べ物を持ってきてくれ」とエドワードは命令しました。

「肉、パン、そして果物もだ」

トムはとてもおなかをすかせていたので、その食べ物をあっという間に食べました。

「さて」と王子はほほ笑んで言いました、「お前の名前は何という？ お前はどこに住んでいるのだ？」

「俺の名前はトム・キャンティで、プディングレーンのそばの一部屋に家族と一緒に住んでいます」

「一部屋に？」と王子は言いました。

「お前たち皆で一つの部屋に住んでいるのか？」

「はい」とトムは言いました。

「ここには何百もの部屋がある」と王子は言いました。

「私には5部屋あるぞ」

「俺たちはすごく貧乏なんです」とトムが言いました。

「俺の父さんは働きません、それで俺は金をせびってるんです。俺が金を家に持って帰らないと、父さんは俺のことを殴るんです」

「ああ、お前の父親がお前を殴るとは」と王子は言いました。

「私の兵隊をお前の家へ送り、彼らがお前の父親を牢屋へ入れよう」

「いいえ、いいえ、どうか、王子さま！」とトムは言いました。

「俺の母さんや姉さんたちのことを考えてみてください」

「分かった」と王子は優しく言いました。

「私には二人の姉がいる。レディー・エリザベスとレディー・メアリーだ。レディー・エリザベスはとてもすてきだ、しかし私はレディー・メアリーのことは好きでない。レディー・メアリーは決して笑ったりほほ笑んだりしないのだ。私にはいとこもいる、レディー・ジェーン・グレイだ。彼女は私と同じ年でもとても親切だ。しかし私は男の子を一人も知らぬ。お前は他の少年たちと遊ぶのか？」

「もちろん遊びます」とトムは言いました。

「私は遊ばぬ」と王子は悲しそうに言いました。

「お前たちは何をして遊ぶのだ？」

「俺たちは川のそばで遊ぶんです、泳いだり、泥の中で跳ねたりするんです」とトムは言いました。

「俺たちは王子や兵士になって遊ぶこともあれば、ボール遊びをすることもあります。俺たちは踊ったり歌ったり、あと大騒ぎもします。いつもとっても楽しく過ごします」

「一生に一度は川のそばで遊び、泳いだり、泥の中で跳ねたりしたいものだ。しかし私は王子だからできぬ」とエドワードは悲しそうに言いました。

王子は窓の外に目をやり、そして突然言いました。

「ひとつ案がある！ 鏡を見よ。お前と私は同じだ。お前はまるで私、そして私はまるでお前だ」二人の少年はどちらも痩せていました。

彼らは同じ茶色の髪、同じ茶色の目、同じ鼻、同じ口、そして同じ声をしていました。

彼らは背丈もまた同じでした。

彼らはほとんどそっくりなものでした。

王子はわくわくしていました。

「服を取り換えよう。少しの間、お前が王子になり、私がこじきになるのだ。いい遊びになるぞ！素晴らしい遊びだ。その古い服を脱いで、私の服を着てくれ。少しの間、私たちは共に幸せになれる」

トムは顔を洗い、王子の上品な服を着ました。

そしてエドワードはトムの汚れた古いズボンとシャツを着ました。

今やエドワードはトム、そしてトムはエドワードとなっていました。

彼らはお互いを大きな鏡で見ると、大声で笑いました。

「私が戻ってくるまでここにいてくれ」と王子はうれしそうに言いました。

「私は 1 時間こじきになりたいと思う。他の少年たちと一緒に川で泳いだり、泥の中で跳ねたりするつもりだ」

出かける前、王子は何か大きくて丸い物をテーブルから取り上げました。

王子は部屋の隅へ行き、それをイタリア製の古いよろいの中に置きました。

そしてドアから走り出て行きました。

「でも俺は何をするんだ？」とトムは自分に問いました。